奈良・酒船石（さかふねいし）遺跡

1　所在地　奈良県高市郡明日香村岡

2　調査期間　第九次調査　一九九七年（平9）三月～四月、第一〇次調査　一九九七年四月～八月

3　発掘機関　明日香村教育委員会

4　調査担当者　相原嘉之（第九・一〇次調査）、清岡廣子（第一〇次調査）

5　遺跡の種類　官衙跡

6　遺跡の年代　飛鳥時代～中世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

（吉野山）

酒船石遺跡は、飛鳥の小盆地の東にある丘陵に位置する。この丘陵の上には謎の石造物と呼ばれる「酒船石」がある。この丘陵の北斜面で一九九二年に大規模な土地造成痕跡と石垣遺構が発見され、『日本書紀』に記される斉明天皇の「宮の東の石垣」にあたると考えられた。その後一九九四年度の調査では、さらに下に三重の石垣があることが判明した。一方、飛鳥京跡は一九五九年から継続して調査が実施されており、これまでの調査によって、同一場所に三時期の宮殿遺構が存在することが判明している。このうち最も新しい宮殿遺構は、後飛鳥岡本宮を改造・整備した天武天皇の飛鳥浄御原宮である可能性が高いと考えられている。

今回の調査地は、酒船石遺跡のある丘陵の西側平担部に位置するが、飛鳥京跡の東外郭塀の外（東）側であるので、酒船石遺跡の範囲に含めることとする。なお、今回の調査は、執行年度の関係で、一九九六年度に南半を第九次調査として実施し、一九九七年度に引き続き調査区を拡張する形で北半の第一〇次調査を行なった。

検出した遺構は、大きくA・B期の二時期に区分される。A期には、南北棟の大型掘立柱建物やこれに伴う石敷・石組溝などがあり、出土遺物から七世紀後半の天武朝には機能していた遺構群と考えられる。B期には、これらの遺構を埋めて造られた石組溝SD一〇や石積遺構・素掘溝などがある。

木簡が出土した遺構は、南北方向の石組溝SD一〇である。第九次調査区でSD一〇の南半を、第一〇次調査区で北半を調査しており、一連の遺構である。SD一〇は、幅二m、深さ一mで側壁に花崗岩を積んでいるが、石材は大小様々で積み方は雑である。埋土は大きく二層に分かれ、上層に黒灰色粘質土、下層に灰色粗砂が堆積

する。遺物は下層に多く、木簡をはじめ土器・木片が多数出土した。土器は現在整理中であるが、飛鳥Ⅴ（藤原宮の時期）の時期のものである。木簡は、第九次調査で一三点（全て削屑）、第一〇次調査で一五点（うち削屑九点）、計二八点出土した。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□□〔私カ〕マ安麻呂　091

(2)　田直佐　091

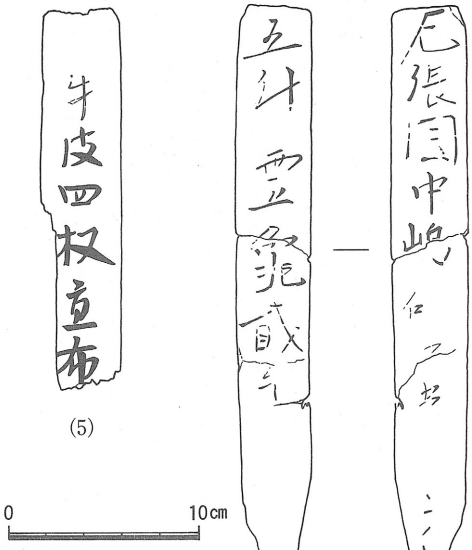
(3)　□□□〔頭遠カ〕家家□　091

(4)　・「尾張国中嶋〔郡カ〕□□□□□〔白米カ〕」

　　・「五斗　霊亀弐年　」　157×20×5　051

(5)　牛皮四枚直布　(102)×22×4　081

(1)～(3)は第九次調査出土分、(4)(5)は第一〇次調査出土分である。(1)と(2)は人名を記す。(1)の私部安麻呂に関しては、正倉院文書に同名の人物が天平宝字年間の造東大寺司画師として登場するが（『大日本古文書』編年文書巻四、二六頁など）、溝の年代からみて別人であろう。(3)は習書木簡の一部か。(4)は完形の荷札木簡である。全体に墨痕が薄く、赤外線テレビカメラ装置で釈読した。霊亀二年の紀年からみて、溝の下限が奈良時代に下るとともに、付近にその頃白米の供給を受ける機関があったことを推測させる。(5)は上下が折損している。牛皮の直として布の量を記した木簡であろう。牛皮は主に履物に加工されたもので、令制では、大蔵省と内蔵寮がその加工にあたっていたことが知られる。発掘場所は飛鳥京跡東方に近接しており、この木簡がそうした官衙と関連する可能性もあるが、この木簡の年代とともに、なお今後の検討を要する。

9　関係文献

明日香村教育委員会『明日香村遺跡調査概報　平成八年度』（一九九八年）（1～7・9相原嘉之、8寺崎保広（奈良国立文化財研究所））